

未来への文化遺産～世界に誇る野外博物館北海道開拓の村

第5回 余市のリンゴと養蚕…東北地方と北海道の関わり

野外博物館北海道開拓の村 館長(学芸員)
一般財団法人北海道歴史文化財団 事業本部長

中島 宏一 (なかじま こういち)

1992年、財団法人北海道開拓の村(現、一般財団法人北海道歴史文化財団)入職。北海道開拓の村で学芸員として勤務。2016年より現職。



今回は、開拓の村の建造物をとおして東北地方と北海道との関わりを、会津と庄内の両地方を取り上げてお話しします。

1 会津と北海道とのつながり

会津地方では、昔から「ハレの料理」には北海道産のニシンや棒タラ料理がお膳を彩りました。なぜ、日本海に面していない会津地方に北海道の産物が伝わったのでしょうか。

会津と北海道との関わりは、会津藩が1859(安政6)年から1868(慶応4)年までの9年間にわたり、北辺警備を目的としてオホーツク沿岸の紋別、網走、斜里、士別地域を経営したことに始まります。この時、会津の人たちは海岸に打ち寄せるニシンの大群や海辺に干していた棒タラに触れ、これらの産物が西廻り航路(北前船)を使い新潟経由で会津まで運ばれました。会津地方の郷土料理のうち、ニシンを使った料理といえば「ニシンの山椒漬け」で、ニシン鉢さんしょうという四角いやきものに身欠きニシンと山椒の葉を交互に積み重ね、三杯酢で漬け込んだ郷土食です。そして、干物状態の棒タラを原形からは想像ができない姿、色、軟らかさとすばらしい味に変え、正月や祭りの食として定着してきたのが「棒タラ煮」です。



板かるた(下の句かるた)
：北海道開拓の村蔵



ゲタスケート(げろり)：北海道博物館蔵

一方、会津から北海道に伝わったものでは「板かるた」があります。下の句を読んで下の句を取る「下の句かるた」ですね。会津では、昔から同地方の朴ほうの木で製作する漆器の箱物(重箱)等の余り木で「板かるた」を作っていたといわれています。また、現代のスケートにつながる「げろり」はその呼び名も使い方も会津と北海道では同じです。1854(安政元)年には、箱館奉行所から「げろり、そり遊びはけがをするためやめるように」といった触書が出ていることから、すでに幕末には道南地方で子どもの遊びとして定着していたことがわかります。

2 会津と薩摩によって結実した余市のリンゴ

余市町内の中心部に「黒川」、余市川の対岸には「山田」地区があり、両地区を結ぶ橋は「田川橋」です。1871(明治4)年、この地に入植した旧会津藩士たちは、余市入植の恩人である黒田清隆の「黒」と移民団総代の宗川熊四郎の「川」から「黒川」、開拓権判官の大山荘太郎の「山」と黒田の「田」を合わせて「山田」、両地区を結ぶことから「田川橋」と名づけたといわれます。

会津の人たちがなぜ余市に入植したのでしょうか。

戊辰戦争で多大な損害を受けた会津藩は領地を没収され、廃藩になりました。1869(明治2)年、旧藩主



鮎が遡る北限の川で知られる余市川

の松平容保に実子が生まれ、その後家名の再興が叶うと、今の岩手県の一部と青森県下北半島の一部のおよそ3万石が藩士のその家族1,700余名に与えられ、斗南藩と定められました。一方、新政府は旧会津藩士の北海道移住を計画し、規模が縮小されましたが、旧藩士及びその家族が同年10月までに小樽に到着しました。小樽に到着した移民団は政府の都合でしばらく当地に留め置かれていましたが、黒田清隆開拓次官（当時）の取り計らいにより、1871（同4）年になってようやく入植地が定められ、余市川河口地域に落ち着くことができました。

そして、黒田等がアメリカから持ち帰ったリンゴの苗木が移住者たちに配られると、明治後期には入植地一帯がリンゴ果樹で覆われるようになりました。なかでも、1879（明治12）年に実り、品種を「19号」とした真っ赤なリンゴは会津の誇りの意味を込めて「緋の衣」と名づけられました。緋の衣とは、旧会津藩主の松平容保が孝明天皇から賜った緋色の生地で作った陣羽織を指します。現在、余市町はリンゴのほか、ブドウ、サクランボ等の果樹栽培の代表的な地域となりましたが、その礎を築いたのは会津の人たちでした。

3 琴似に入植した屯田兵は会津出身、養蚕を手掛ける

1875（明治8）年、東北地方や道内で募集された最初の屯田兵とその家族200戸が札幌の琴似に入植しました。この中には旧仙台藩士が多数占める中、旧会津藩士も50数名含まれ、斗南藩に移った旧藩士が大部分を占めていました。屯田兵を含めて、明治初期に北海道に移住した旧会津藩士は約400戸、1,500人にのぼり、北海道開拓に重要な役割を果たしました。

北海道開拓の村に、琴似神社（札幌市西区）近くにあった「旧山田家養蚕板倉」という小さな建物が移築復元されています。この板倉を1881（明治14）年に建てたのは会津出身で旧斗南藩士の山田貞介です。貞介は、戊辰戦争の際には若松城（鶴ヶ城）に籠城し、

旧山田家養蚕板倉



史跡 琴似屯田兵村兵屋跡

その後斗南藩に編入され両親と共に同地に移住、1874（明治7）年には屯田兵の募集に応じて琴似屯田兵村に入植しました。貞介は道内の屯田兵村の建設や教育指導にあたったほか、兵村では農業に勤しみ、養蚕や果樹の栽培、畜牛の飼育等を試みました。山田家は兵村の68番の兵屋を与えられ、兵屋の南側（現在の西区役所の東側、琴似神社がある一角）には授産所（琴似養蚕室）がありました。

山田家をはじめ、琴似の屯田兵は養蚕に取り組みましたが、この兵村地区の桑だけでは不足するので、現在の知事公館からJR桑園駅にかけて広がる桑園に、桑の葉を積むために往復しました。ここでは、琴似屯田兵のために養蚕を奨励した際、一戸あたり一反歩ほどの桑畑が希望者に与えられ、桑摘みの時は必ず集団で早朝に出かけました。

屯田事務局は兵村授産の方針として養蚕を積極的に奨励しました。桑園の育成ばかりではなく、各戸に養蚕技師を派遣し、養蚕設備には補助するといった育成策が配慮されました。

4 庄内藩と西郷隆盛、松ヶ岡開墾場の造成

琴似屯田兵村に入植した屯田兵たちが桑の葉を摘みに来た桑園はどのように作られたのでしょうか。これには、庄内藩と薩摩藩との交流からお話ししなければなりません。

戊辰戦争では、庄内藩は会津藩等と共に旧幕府軍として戦い、新政府側に降伏しました。しかし、他藩と異なる点は、藩内では目立った戦火を交えず、城下が混乱しなかったことです。戊辰戦争における庄内軍は軍略に長けていました。その理由として、安政期以来の軍事の近代化、藩主酒井家の善政による士族の融和団結、豪商本間家の豊富な財政力による食糧と兵器、弾薬のスムーズな供給体制が軍力に勝る政府軍との戦いで互角以上の威力を発揮しました。幕末、庄内藩による官民あげての留萌、浜益の経営が注目されるのも、



松ヶ岡開墾場の大蚕室（明治8年）

こうした同藩の近代的思想が素地にあったのだと思われます。

1869（明治2）年、旧庄内藩は政府の富国強兵政策の下で近代化を目指し、この過程で薩摩藩との交流が始まります。旧庄内藩では、鶴ヶ岡城（現、鶴岡市）開城時に新政府軍の参謀を務めていた黒田清隆の紳士的かつ寛大な姿勢に一目おき、旧藩主の酒井忠篤は東京で度々旧薩摩藩士と交流していたといわれます。そして1870（同3）年、忠篤は旧藩士70余人を率いて鹿児島島に赴き、100余日間にわたり西郷隆盛の指導の下で、練兵や尚古集成館で兵器製造や紡績を学ぶことになりました。

これをきっかけとして庄内と薩摩は強く結びました。特に、忠篤をはじめ旧藩士の西郷に対する畏敬の念は強いものがありました。そして、庄内地方では殖産経済政策として蚕糸業振興に取り組むこととなります。1871（明治4）年、西郷と懇意だった中老の菅実秀が藩財政の救済と地域振興、士族授産を目的として、大規模な養蚕製糸事業の創業と桑園造成を構想しました。これが西郷も絶賛した、月山山麓の広大な原野を開拓した「松ヶ岡開墾場」です。本開墾場の造成には2,890人におよぶ開墾団を編成し、1874（同7）年までに311haの桑園を造成しました。

5 庄内藩士による桑園開墾

そして、札幌の桑園開墾です。

開拓長官黒田清隆は、屯田兵授産をはじめとする農業振興事業に養蚕を取り入れるため、松ヶ岡開墾場の造成を成功させた旧庄内藩士たちに、札幌と大野村（現北斗市）に桑園の開墾を要請しました。1875（明治8）年5月、庄内側では松ヶ岡開墾チームが北海道開墾団を編成し、札幌組は6月1日に小樽に到着、翌日に銭函村で黒田と旧庄内藩士の松本十郎大判官の出迎えを受け、早速4日より作業を開始しました。



桑園碑

札幌の開墾地は、現在の札幌市中央区北1条西8～9丁目に設置した養蚕場の西側の同西11丁目から20丁目に広がる160haのうちの70haでした。黒田と松本が度々現地を訪れて慰勞

し、特に松本は菓子などを持って毎日のように開墾団を励ましたといえます。一方、大野村の開墾地は現在の北斗市大野の向野地域にある約33haで、松本はここにも慰勞に訪れています。札幌の開墾は9月8日、大野村は同月20日に終了し、開墾団は帰途につきました。この後、松本は1877（明治10）年に起きた西南戦争に際し、旧庄内藩を救う大きな役割を果たすこととなりますが、この話は別の機会にします。

その後の桑園開墾地は、札幌では「酒田桑園」と呼ばれ、福島や群馬県の桑苗が移植されましたが、庄内分とともに北海道の寒さに耐えきれず、1879（明治12）年に全滅してしまいました。これ以降、自生する野桑を移植し、徐々に北海道の気候に適合した桑樹の研究開発が進められていくこととなります。開墾地の宿舎跡（現在の知事公館）は、森源三（札幌農学校校長）が購入し、桑園開拓の由来を板棒に書いて道路側に立て、その嗣子の宏が高さ2.4mの「桑園碑」を建立しました。その後、1965（昭和40）年、現在の桑園碑が新たに建立され、翌年5月28日（旧庄内藩士酒田出航の日）に除幕式が挙行され、再建されました。

6 浦臼の養蚕—田村忠誠と関矢才五郎

北海道における養蚕は、江戸期の安政年間、八王子千人同心による七重、大野、箱館の住民に蚕卵紙を配布して養蚕を奨励したことに始まり、旧庄内藩士による桑園開墾が道内の養蚕振興に大きな礎となり、北海道庁設置以降も奨励されたこともあり、明治大正期は、道内のほぼ全域で養蚕が取り組まれるほどになりました。こうした中、高知県出身で養蚕研究の第一人者である田村忠誠が浦臼内（現浦臼町）に入植します。

浦臼内で養蚕が行われるようになったのは、1894（明治27）年聖園農場に移住してきた藤田卯之助といわれ、豊富に自生する野桑を背景として農場主の土居勝郎も大いに奨励しました。1902（同35）年、土居は同農場事務所に養蚕室を設置し、翌年には簡易養蚕伝授所を開設しました。この伝授所の教師として高知県から招聘したのが忠誠です。

一方、同じ浦臼地域の晩生内では、関矢才五郎が養蚕を奨励し、これまでの藍作に代わる換金作物として養蚕の普及に努めました。才五郎は1887（明治20）年に江別に入植した北越植民社の一員で、同社は払下げ

を受けた晩生内に1893（同26）年から入植し、才五郎は同社社長の関矢孫左衛門から晩生内の管理を任せられました。晩生内地域は肥沃な土地でしたが、石狩川の水害が毎年のように発生したため、主要作物もこうした自然環境に耐えうる作物を栽培せざるを得ませんでした。そこで考え出されたのが養蚕と藍作でした。桑と藍は多肥作物で、毎春の氾濫で上流から流れてくる栄養豊富な土壌がこれらの作物の栽培を可能にしました。

そこに現れたのが忠誠です。蚕種製造者であり養蚕教師として高知県で十分な実績を誇った忠誠は、地域住民に養蚕の技術指導のほか、養蚕が国家的事業であることを積極的に啓蒙しました。その結果、忠誠が浦臼に入植した1901（明治34）年の時点で、浦臼村内の桑畑面積は21町歩、養蚕戸数は330戸であったのが、1910（同43）年には桑畑面積88.85町歩、養蚕戸数も615戸に倍増するなど、浦臼を一大養蚕地帯に発展させたのです。

7 北海道の養蚕振興に寄与した忠誠・亦次郎父子

1850（嘉永3）年、高知県高岡郡永野村（現、同県佐川町永野）に生まれた忠誠は、養蚕の研究に没頭し、同県内の養蚕と製糸で伝習所の教師として地域の養蚕振興に尽力しました。浦臼に移住後も養蚕伝習所等の教師を務め、地域住民に技術実習、学科教習、生繭乾燥法などを教授し、養蚕の普及に努めました。関矢才五郎も忠誠の講義を受講しました。

忠誠は自宅兼蚕種製造所の「北誠館」で繭の品種改良にも挑み、欧州及び中国雑種を購入して一代交雑種の基礎を開発したほか、本州産に比肩しうる収繭力を誇る優良な品種の研究に取り組みました。忠誠が生産した繭は毎年のように品評会で評価され、宮内省献納をはじめ東京帝国大学に標本保存されるなど、忠誠の技術は品質良好な繭を生産する蚕種の販路拡大に大きく寄与しました。

忠誠の後、「北誠館」の経営を引き継いだのは子の亦次郎です。1927（昭和2）年、折しも昭和恐慌の煽



旧田村家北誠館蚕種製造所

りを受けて蚕種の出荷が減り、大量の在庫を抱えてしまいました。そこで亦次郎は泣きながら自分が製造した蚕卵紙を自宅横に架かる田村橋のたもとで焼却したといいます。それでも亦次郎は営業案内書を各地に配布するなどして積極的に蚕種販売に取り組みました。亦次郎は、この頃から浦臼村役場に勤務し、1963（昭和38）年には浦臼町長に就任しました。在任中は、町政のトップとして災害復旧に寄与する砂防ダムの建設、聖園団地をはじめとする団地形成やスキー場の造成、各学校に家庭教育学級を創設して家庭教育の重要性を説いたほか、老人クラブ設置を奨励して高齢者に生き甲斐を持たせる施策を推進しました。さらに、現在に至る「名誉町民条例」を制定しました。

北海道開拓の村には、田村忠誠・亦次郎が蚕種製造に勤しんだ「旧田村家北誠館蚕種製造所」が移築復元され、毎年夏期には同建造物内で職員とボランティアが協働して蚕を飼育し、蚕が繭を作る「上簇」をリアルで観察できるなど、人気を博しています。

8 養蚕の終焉

北海道庁は養蚕を貴重な道産物と位置づけ、道内の養蚕業の普及と発展に努めていました。これを受けて、浦臼村では1909（明治42）年に晩生内養蚕組合を設立して生繭乾燥場を設置し、翌年には浦臼養蚕組合も設立して乾燥場を設置しました。製糸技術の普及活動も盛んで、製糸製綿伝習所を開設しました。

蚕種製造は忠誠と才五郎が中心となって進めました。1905（明治38）年から5年間は7戸ほどの蚕種製造所でしたが、1912（同45）年以降は両者だけとなりました。それでも、忠誠と才五郎は毎年数千枚の蚕卵紙を生産し、道内のほか四国や九州地方に出荷して浦臼の名を高めていました。当時は春蚕の蚕卵紙が販売される7月頃になると、商人や仲買人が浦臼の町に大挙して押し寄せ、町は祭りのように賑わったといわれます。

しかし、昭和時代に入ると世界的な絹織物類の価格情勢の激変と国内の産業構造の変化によって繭価が下落し、浦臼村内でも養蚕を営む農家が減少していきました。結局、道内で最後まで蚕種を製造していたのは亦次郎だけでしたが、亦次郎が経営していた「北誠館」も1948（昭和23）年には廃業し、産業としての養蚕業は北海道から姿を消すことになりました。